

緊張が続く戦争末期

清水 不二

太平洋戦争開戦

昭和16年12月8日、私の女学校一年の時、太平洋戦争は始まった。日米交渉の成り行きを見守っていた国民も、真珠湾の奇襲攻撃のニュースに、いよいよ戦争が始まったという緊張感の中で、物量豊富な米英相手に大丈夫なのかという不安は内心あった。ついにやっとなら、拳をあげる人も多い時代であった。後で聞いたことでは、天皇は勿論、海軍も、政治家の大部分も戦争に反対であったという。ABCD（アメリカ・英国・支那・オランダ）包囲陣という言葉がよく使われていたが、それらの国と無謀な戦争をしたものである。でもその頃は、日本はまだ一度も外国に負けたことがない神国だとか、神風が吹くとか、精神力のみを強調することに13歳の私にも内心抵抗するものがあった。

昭和天皇が宣戦布告の詔書を8日に発せられたので、それ以来毎月8日を大詔奉戴日と政府が決めて、必勝の信念を新たにするとした。

私の通った女学校は新宿角筈にあったので、学校から明治神宮まで毎月隊伍を組んで歩き、必勝祈願の参拝をした。

東京の初空襲

昭和17年4月18日、東京にB25爆撃機による初空襲があった。

開戦から僅か4ヶ月、私共は土曜日で学校の授業は午前中で終わり、半数以上の生徒は下校していた。清掃当番で、少し遅れて数人の友人と帰ろうとした時だった。ぼんぼんと爆発音がして、南の空を飛んでいる飛行機が見えた。まさか敵機とは思わず見ていると、飛行機に対してビルの上からまた高射砲らしい白い煙がぼんぼんとでた。間もなく空襲警報のサイレンが鳴り響いた。校舎内に避難するように、先生からの指示があり、教室の机の下にもぐって様子を見た。この頃、防空壕はまだ沢山はなかった。日本軍の真珠湾攻撃から、フィリピン、マレー半島の占領など、戦果を聞いていて、まさか急に、東京の上空にアメリカの飛行機が現れるとは、思ってもいなかった時のことだった。

間もなく敵機は退散したということで帰宅した。後日、新聞で、早稲田の校庭に数十発の焼夷弾が落とされたこと、また、南方海上の航空母艦から飛び立った飛行機であることも、知った。

戦時色強まる

女学校でも、体操の時間に軍隊のように、クラス毎に分列行進の練習で、『歩調とれ!』とか、『頭右!』とか、やったのを思い出す。防空訓練では、手旗信号や、焼夷弾を消すためのバケツリレー、救助訓練では、止血

の仕方、包帯の巻き方、担架の運び方などを練習した。

いやだったのは、『臣民の道』という小冊子を一人一人に持たされて、今で言うホームルームの時間に読まされ、感想文を書かされたりしたこと。軍国教育を徹底する為か? 鬼畜米英とか、弱肉強食の米英とかの言葉にととてもついていけないものを感じた。

新聞に、捕虜になった米兵を見た婦人が、「お可愛そうに、といった」と言う事が大きな記事になり、「そんな非国民が、まだいる」と世間の非難を浴びた。翌日、校長先生も、講堂の講話で、その事を取り上げられ、その婦人を非難させたことに、私は強いショックを受け、自分が感じたことを一切口に出してはいけないと思った。『生きて虜囚の辱めをうくることなかれ』とする戦陣訓が全軍に出されていた時代である。小学校でならったナイチンゲールのお話や、日露戦争で、日本が勝ったときの水師營の会見での乃木大将の武人としての態度、人間としての思いやりとは、ずいぶん違ってしまった。

戦局は次第に悪化し、昭和18年10月学徒出陣、19年2月25日閣議で決定された決戦非常措置要綱で、学徒勤労動員（中学生以上の生徒）・女子挺身隊（14～25歳の未婚の女性）として軍需工場に動員が決められた。

立川飛行機での動員生活

私達の学校も19年8月から5年生は中島飛行機工場へ、4年生は立川飛行機工場と、北辰電気へ分かれて動員された。私は、家が阿佐ヶ谷であったので立川飛行機に行くことになった。

立川の駅を降りると強制疎開の跡地（延焼を防ぐ為、強制的に建物を取り壊した空地）で、普通の家はなく、工場に勤務する人や学徒動員の生徒の通勤でいっぱいだった。立川飛行機に動員された学校は10校を超えていたようだ。

始めは工場で、現場のプレス、旋盤の機械の使い方、板金の方法等教えてもらい、実習の後現場に配属された。そのうち理系志望の6名は、技術部研究三課に回るよう先生からのお話があり、9月から、そこの仕事を手伝うようになった。

そこでは、飛行機の気密室を作るための実験をした。先ず技術科長嶋本大尉から実験の内容についての説明があった。それは飛行機の高度が高くなると、上空のうすい空気では人間が耐えられないので、操縦室は、気密室にして、1気圧に保つ。そのとき操縦かんとか各種計器から漏れる空気のように、部屋の圧力と温度の変化、操縦かんを扱う時の力の変化などについて、気密の大きな箱の中の気圧を上げ、内外の気圧の差を1万メートルと同じにしてその実験をするのだ。

しかし、その年の11月ごろから、B29の偵察機が1万メートル上空に度々現れるようになり、まだ日本には気密室も出来ていないらしいので、

この実験は遅れていると思った。

技術大尉が、気密室のある飛行機で、かなりの高度まで上る試験飛行を、立川飛行場でなされ、間もなく無事帰えられて、上空はとても寒くて、がたがた震えたとおられた。日本には、まだ1万メートルまで上られる飛行機は、なかったのだろう。

そのうち、学徒全員に「日の丸の両側に神風と書かれた神風鉢巻」が配られ「必勝の信念を堅持し、お国のために仕事に励むように」との訓示があった。万に一つも生きて帰ることのない特攻隊の敵艦への体当たり攻撃の戦果を胸が詰まる思いで聞いた。立川では、神風週間というのがあり、鉢巻をして私達学徒も頑張ることを誓った。

20年に入ると、空襲は激化し、飛行場や、軍需工場がある立川は、空襲の目標とされ、工場は、次々爆撃された。急の空襲の時は、机の下にもぐるしかなかった。急降下し、低空でものすごい大きなバリバリという音で、機銃掃射して飛び上がる。これを繰り返す数機で同じ建物をやったらしい。大尉は、「やつらは、よく調べている。エンジンの工場を真っ先にやつたな」とつぶやかれていた。

ある時は、警戒警報が鳴り「艦載機が南方洋上より沢山の編隊を組み、富士山方向に向かっている。ここで方向をすこし変え立川方面に向うものの如し」「学徒は、遠い疎開せよ」というアナウンスがあり、この時は隣町の国立の松林か、今の一ツ橋大学の中まで、走って逃げた。一度は途中で、機銃掃射にあい、突然、急降下した飛行機から、バリ、バリ、バリとものすごい大きな音とともに、近くに砂煙が上がった。友達と二人で、あわてて道端にある防空壕に飛び込みやと助かったこともあった。この時は、降りてくる飛行機の米兵も見え、とても恐ろしく、悔しかった。

「遠い疎開」は、前の空襲で、工場に死者や怪我人がでたので、学徒を少しでも安全なところという配慮であったのだろう。

本土「決戦」という言葉が使われるようになった

3月10日零時過ぎより東京に大空襲があった。「B29約130機が帝都に來襲、市街地を盲爆せり」との大本営の発表があり、都内各所に火災が生じたことも伝えられた。阿佐ヶ谷の自宅からでも東の空がオレンジ色に変わって見えた。この空襲で下谷・浅草・本所・深川・城東の各区の大部分のほか足立・神田・麹町・日本橋・本郷・芝・荒川の各区の半分が焼け35区の内25区に被害があり、多くの人が焼け出された。後の記録では、死者124,711名、罹災者1,008,005名、投下焼夷弾48,194と書かれている。

立川は、東京の西部であったので、勤務する者も、友達も、西部に住んでいる人が多く、被災を免れたが、北辰電気(目蒲線の下丸子)に行った友達は、どうなのか心配であった。

これより少し前に、研究室で一緒に実験をしていた6人の一人が、原因不明の病気でなくなった。明るい人であったが、栄養状態は悪い時代だし、休日もなく過労であったのか？葬儀には嶋本大尉が行かれた。柩に納められた彼女は、制服を着て、日の丸の付いた神風鉢巻をしていたという。

3月24日は、新宿にある母校で、卒業式があった。私達、4年生も戦時下の特別措置で、5年生と一緒に卒業になってしまった。北辰電気と立川に分かれていた友達と、会えたことがほんとうに嬉しかった。

5年制の女学校の4年の1学期までしか勉強していなくて、卒業してしまった。研究第三課の6人も、1月、2月に、それぞれ目的の上級学校の試験があり、それぞれ進むべき道は決まっていたが、勤労動員延長令で、3ヶ月はそのまま立川の職場で仕事をすることになった。

当時の食糧事情

戦局の悪化に伴い配給の食糧もぐっと少なくなり、夕食は家でお芋や野菜の入った雑炊などを、電灯を黒い布で覆った薄暗い光の下で食べた。昼食は立川飛行機で働く徴用工、挺身隊、動員学徒が広い食堂に集まり、アルマイトの深皿を持って並び、盛り切りのご飯と、菜っ葉の煮付けを盛ってもらい、配給とは別に食べられた。大変粗末ではあるが、ご飯が満足に口に入らない時代には有難かった。「欲しがりません、勝つまでは」と言う標語のように、すべて我慢の世の中であった。

母は家の庭を全部畑にして、素人ながら枝豆、胡瓜、茄子、トマト、かぼちゃ、とうもろこし、等防空壕の上にまで作っていた。17歳の食べ盛りの兄と、16歳の私に何とか食べさせたいと一生懸命だった。父も朝早く屋根の上に伸びた南瓜の交配など時間の許す限り手伝い、一家はなんとか酷い空腹にならずにすんだ。この時小さい子のいる家庭は、お母さんが働けないし、配給は少ないしで、大変だったと聞いている。

女学校の同期生で立川にも一緒に通った友達の「ゆうちゃん」が隣に住んでいた。「ゆうちゃん」は、東大の工学部の研究補助員として4月から働くことになり、暫く会えない日が続いた。戦後、間もなく結核で東大病院に入院していて会いたがっていることを母上から聞き、驚いて面会に行った。とても喜んでくれたが、話をしながら肩で息をし、「高価な新薬の注射も効かないのよ」ともう死期を悟っているようであった。やせた青白い手が衰えてであった。それから間もなく亡くなった。やはり栄養状態の悪さが一番の原因と思う。16歳でこれからという時の親友の死だった。

4月13日の大空襲で、卒業したばかりの母校が焼けた

この頃になると空襲警報は日常的になっていたが、この夜13日の夜半から14日未明にかけてのB29の大編隊の空襲は大掛かりのもので、皇居の西北部、新宿・豊島・文京が焼け、この時母校も焼失。翌4月15日城

南地区が焼けたりしい。

研究所の疎開

4月に入って研究所がそっくり遠くに疎開することになり、色々教えていただいた嶋本大尉や、親切にいただいた今沢課長と、お別れであった。大雪で中央線が止まったとき、暫く課長さんの部屋で暖まって帰りなさいとってくださったり、暖かい方たちであった。

私達研究所の学徒は立川飛行機の生産技術研究所（当時は国立にある山水中学の中に既に疎開していた）に回るようになった。そこでの私の仕事は、106という木製機の図面の修正であった。小さな木製の飛行機と聞いて、やっぱり日本はもうだめなのか？という思いであった。前の研究所の仕事とは違い、纏まった仕事もなかった。後で思ったことであるが、これが、特攻機であったかもしれない。

毎日、休日もなく、朝早くから満員電車で研究所へ、帰日も電車が不通で途中まで線路を歩いて夜遅くに家についたこともあった。夜中は、毎日のように、警戒警報、空襲警報で、安眠できず、栄養も十分でなかったこともあり、4月末頃から疲労も重なって微熱が続くようになった。ツベルクリン反応が陽転していた事もあり医師の診断は、「静養を要する」であり、5月から自宅療養となった。懸命に戦っている人々、職場の友達に、申訳ない思いでいっぱいであった。

5月24日の東京大空襲

24日の夜から25日にかけての空襲は大規模で、方々で火の手が上り、空は赤黒い色でおおわれた。そのうち、B29の大きなうなるような爆音と焼夷弾のザアッと落ちてくる音がして、これは近いと感じた。旧制高等学校1年の兄は学徒動員で消防署勤務、消防署の望楼に登っているとのこと、めったに会えないので心配だった。これまでに焼け残った都内、都下など全域にわたる焼夷弾投下があったようである。

中野から高円寺まで、高田馬場方面も焼けたということであった。阿佐ヶ谷の我が家の近くまで焼夷弾が落ち、駅の近くの友達の家は焼失した。真っ赤な空、人々のざわめき、焦げ臭いにおいで、近くまで焼けたことがわかった。翌朝、高円寺の焼け跡へ、知り合いのお店を尋ねて、阿佐ヶ谷から歩いて行って見て、青梅街道から高円寺駅まで焼け野が原で、どこが知り合いのお店かわからず、呆然とした。みんな無事であることを祈るだけであった。阿佐ヶ谷駅から南へ青梅街道までは、既に強制疎開で沢山の建物が壊されたままの状態であり、空き地になっていた。

函館に疎開

5月の始めごろドイツの降伏が伝えられ、空襲は日に日に多くなり、

5月末、医師の勧めもあり、私は両親の故郷の函館に疎開することになった。東京が壊滅的な空襲を受けたすぐあとでのことで、東北のほうへ行く汽車は満員で、立ったまま身動きひとつできず、乗り降りは窓からという状態で、飲まず、食わず、眠ることもできず、トイレにもいけず、やっとの思いで、青森に着いた。上野を出てから何時間だったろう。

青森から青函連絡船に乗るところまで、目隠しの板塀が作られていて、海も見えないまま船の底のほうにつめこまれ、海もほとんど見えない内に函館港についた。青森港も、函館港も日本の重要な要塞地帯であるからだ。

函館の郊外の湯の川という温泉町に、母方の叔父の家があり、祖母も、叔母も、皆、温かく迎えてくれた。小学4年を頭に、4人の従兄弟がいたが、食糧難の時に家族同様に分け隔てなく気持ちよく過ごさせてもらった。お米の配給はほんとうに僅かであったが、ジャガイモから作った澱粉が、袋に入れて沢山配給になり、澱粉餅というものを作って、代用食として食べた。身欠きにしんや、ほっけは、時々配給になり、教師である叔父と叔母は庭に野菜も作っていたので、東京より栄養状態はよく、家事を手伝うだけの生活で、6月中に私はすっかり元気になった。しかし、日本の敗色はますます濃くなり、函館にも、6月末の夜、はじめての空襲警報がでた。空襲とはそれまで無縁だった北海道も戦禍の中に巻き込まれることになる。駅前の肉屋さんが、爆弾で壊されたのは、この日だったように思う。「津軽海峡上空にB29が飛来し、偵察をおこなったもよう」という放送があった。

7月14日には、函館空襲があり、後で知ったことであるが、この時に、青函連絡船の大部分が沈没、15日と8月9日をあわせて、青函連絡船の13隻は全滅した。（これは、最近インターネットではじめて知った。）

函館から東京へ

7月半ば過ぎ、東京の両親からの手紙の中に、東京女子大の「動員令書」が同封されていた。当時、手紙は皆開封され検閲済の印が押されていた。

遅れていた女子大の授業が始まるのがわかり、午前中は授業、午後は作業ということだ。身の危険はどこにいても同じ、しばらくぶり授業が受けられることがとても嬉しく、どうせ死ぬなら家族のいる東京へ帰りたと思う。

7月27日の朝の、函館発東京行きの切符が、「動員令書」のお陰で買う事ができた。叔母の心づくしの澱粉餅と昆布のお弁当を持って、僅かな、身の回りの物を背負って、叔父と函館の改札で別れ、一人になったがさっぱり人の列が動かず、いつ連絡船に乗れるのかわからない。夕方になって、空襲警報ということで、「駅前の防空壕に避難せよ」という指示で、壕の中に入り、また解除で今度こそは船に乗れると喜んだが、その船は軍艦だという。その船底に、海軍の兵隊さんが、乗客の世話をしておられた。そ

ここで連絡船が不足している事は解ったが、まさか、連絡船が殆ど全滅に近い状態であることは、最近まで知らなかった。

船の中はびっしり満員であったが、そのなかに、赤ちゃんを背負った若い女の人があった。赤ちゃんのおむつを替えるとき、赤くただれた小さな皮膚を見て、本当に大変なことだと思った。どんな用件でこの船にのられたのであろうか？緊急の用事の人しか乗船していないはずである。

今その方が生きておられれば、お母さんは80歳を過ぎ、赤ちゃんは60歳になられるはずなのに、その方の事が今でも忘れられない。

青森の空襲にあう

青森に着いたのは、7月28日の夕方だったと思う。

青森で「東京行きの列車が出る」というのでホームへ走っている時、警戒警報で、「駅前の防空壕に避難せよ」という指示、とってかえして駅前の防空壕に肩を寄せあって入った。しばらくして、警報解除でまたホームへ、真っ暗の中、東京行きの列車にやっと乗れてほっとした。船とは違いみんな座れる席があった。

列車が動き出し、二駅目で列車が止まり、空襲警報で、「皆降りて列車から離れるように」というアナウンスがあった。「浦町」という駅で、駅の片側は町の建物、もう一方は水田であった。私達乗客は水田の方に降りた。

やがて、照明弾でぱつとあたりが明るくなり、人や馬が逃げ惑う姿が影絵のようにうつしだされた。照明弾が3発落ちた時、この中がやられるとだれかがいった。ゴワン、ゴワンというB29の編隊の大きな爆音と共にザアザアと焼夷弾の投下が始まった。水田の中にしばらく身動きもせずうずくまった。飛行機から落とされた焼夷弾は雨のように降り注ぎ、これでもか、これでもかと落ちてくる。水田につきながら、駅のすぐ前の建物が次々焼け落ちるのを、為すすべもなく悔しい思いで見ている。

私の周りにも黄燐焼夷弾がいくつか落ち、飛び散った飛沫が手袋や、衣服に着いて青白く光ったので、誰かが黄燐焼夷弾だと言っていた。

29日空が白み始める頃、敵機は去り、ドロドロの焼け焦げのある衣服でまた汽車に戻った。田圃に逃げた人達は大体無事で、また汽車の人となった。

明るくなって汽車を見ると、カムフラージュの泥の色が塗ってあった。

60年も後で知ったことであるが、青森の空襲は東北地方最大の被害で、死者994名、70166名の罹災者をだしたらしい。被害を大きくした原因は、

①アメリカが青函連絡船を攻撃した7月14日、15日以後、市内から疎開・避難する市民が続出したため、21日に県当局が「これら逃避者は28日までに復帰しなければ配給を停止する」と布告、市民が続々帰って来た

夜の空襲であったこと

②空襲前日アメリカ軍が爆撃予告のビラ約6万枚を撒いたものの、憲兵や警察により、読むことを禁止、回収され、警告が伝わらなかったこと。

③投下された焼夷弾が、従来型を改良し、可燃性の都市に効果を挙げるようにした新型焼夷弾であったこと。

再び東京へ

7月29日の朝10時ごろであったらうか、汽車は走り出した。途中まだ煙の上がっている所をゆっくり通り、暫く行った駅で他の汽車に乗り換えるようにいわれ、何度か乗り換えの後、やっと仙台に着いた。

仙台の駅前は空襲ですっかり焼け落ちて瓦礫の原となり、往きに見た仙台駅ではなかった。この線路が東京までつづいているのか心配になった。

函館で27日朝、叔父と別れて何日経ったらうか。はっきり覚えていないが、7月30日の夕方だったと思う、やっと上野駅についた。上野駅に立つと見渡す限りの焼け野が原、あかっちゃけたトタン屋根を防空壕の上にかけて人が住んでいるらしく、人影がちらほら見えるところもある。

とにかく家らしいものは見えず。遠くの山に真っ赤な太陽が沈むところであった。「国敗れて山河あり」という気持ちで、涙があふれた。もう自分の命もあと半年はないだろうと思った。終戦の半月前のことである。

阿佐ヶ谷に着くと、一目散に家へ急いだ。母は叔父からの電話で27日に出たというのに、あまりに時間がたったので心配して、兄も何度か上野駅まで出迎えに出てくれたようだ。

学校が始まる

帰った翌日、東京女子大の門をくぐった。既に授業は数日前から始まっていた。「微積分の、連続の定義」の小林先生の講義で、時間の途中からはいったので、さっぱり解らないけれど、暫くぶりに授業を受けられることに新鮮な喜びを感じた。午後は農作業を手伝ったように思うが、あまり記憶がない。とにかく同じ年齢の人と話ができるのが嬉しかった。

戦争の末期であったが、女子大の雰囲気は、都立の女学校と違い、のびのびしていて和やかさを感じた。前に1月の入学試験の時に、女学校の先輩がきて、入学試験に作文があるかもしれないけれど、女学校と違うから自分の感じたことをそのまま書けばいいので、「便乗なんかしなくていいのよ」と言われ、胸のつかえが取れた気がして、嫌いな作文もこの時ばかりは素直に書けたことを思い出した。

8月6日広島に新型爆弾が投下された

8月8日の朝日新聞が其のままとってあるので書くと「広島へ敵新型爆弾 B29少数機で来襲攻撃」

「相当の被害、詳細は目下調査中 落下傘つき、空中で破裂」という見出しで、人道を無視する惨虐な新型爆弾であることが書かれていたが、一部の人は原子爆弾がついにできたかとショックだったようだ。

8月9日に長崎にもこの新型爆弾が投下された。また同じ日の朝からソ連軍がソ満国境を越えて攻撃を開始した。ソ連の宣戦布告である。日ソ不可侵条約があったのに、である。4ヶ月前に条約を延長する意思のないことを通告していたが、侵攻した8月には条約は未だ有効であった。

勝敗が殆ど明白になってからのソ連の参戦に、私達は憤慨した。今にして思えば、多くの犠牲のでた原爆のこと、ソ連の参戦のことが、あくまで抗戦の軍の態度を変えることができたのかもしれない。

8月15日終戦

天皇陛下の御前会議が開かれていて、間もなく戦争は終わるだろう、と新聞記者である父がわたくしにささやいた。もう死ぬつもりでいた私を驚かせた。

8月14日から「明日の正午に、天皇陛下御自らの玉音放送があるので、国民は謹んで拝聴するように」と放送があり、学校もなく、家で家族一緒にその放送を聴いた。聞き取りにくい悲痛なお声に、やはり戦争は、負けたのだと思った。張り詰めたものが崩れるのと、どこか、ほっとした気持ちがあった。

あとがき

思えば、私が小学校1年の時の二・二六事件、3年の時に支那事変が始まり軍国教育がだんだん強められてゆく時代であった。大正デモクラシーの時代に学生生活をしている両親であったので、学校の教育と家庭の雰囲気とのちがいを子供心に感じて、悩んだこともあった。小学校の頃友達とは「喧嘩をしてはいけない」と言われるのに、国どうしは、どうして戦争をして良いのか？と言う素朴な疑問を持っていたが、そんな事をいってはいけないんだと、心の中にしまいこんでいた。

自由にものが言える時代になって60年、敗戦後の飢餓の時代、復興の時代から半世紀が過ぎ、日本は今、飽食暖衣の時代であるが、子供達の教育に忍耐力とか、感謝の念を育てることの難しさを感じている。

世界にはまだ飢えている子供、戦争で苦しんでいる人達がいる。自分の国さえ良ければいい、と言う考えでは世の中から戦争は無くならないであろう。自国の利益を考えるのは当然のことであるが、それのみに走ることなく、世界全体の平和をと切に願う。